

私の被爆体験 2018. 1. 12. 堀江 壮

あなたは自分が5歳の頃の出来事なにか覚えておられますか？

当時5歳だった私は、爆心地から、3KMの所で、カッケにかかって学徒動員を休んでいた10歳上の姉と 近所にお使い行く途中被曝しました。

姉に手をつながれて山際の道を歩いていたとき、突然強い閃光に驚き、次の瞬間、ものすごい爆風に吹き飛ばされそうになりました。ピカッというものすごい閃光に続いてドーンという音が爆風とともにあったので、広島の人達は原爆をピカドンと呼びました。

姉がすぐ私を自分の体の下にして、道路上に伏せました。非常の際の訓練を受けていたのだと思います。しばらくして付近にあった防空壕に逃げ込みました。何分そこにいたでしょうか、家に帰りました。今の家と違い太い材木を使った大きな家でしたが、右に傾いていました。そして爆風は、窓という窓、ガラス窓、障子、フスマを吹き飛ばし、タタミは家の下からの爆風で持ち上がっていました。

原爆投下がもう数分間遅かったら、山際の道から出ていたら、私たちは強い閃光と爆風に殺されていたと思います。

しばらくしたら、手を前にたらして全身火傷を負った人たちがドンドン私の家に避難してきました。すぐにめっちゃめちゃになっていましたが、我が家は大怪我をした人達でいっぱいになりました。母は子供達の浴衣を裂いて包帯にしました。

大勢いた人達の中で、なぜか2人だけ記憶に残っています。一人は中学生、顔一面が焼けどで、むけた皮が鼻の穴につまり、苦しげに口で息をしていました。鼻の穴につまった皮を母がピンセットで取り除いていました。痛そうでした。帽子をかぶっていたのでしょう帽子のあった場所だけ 頭の毛が残っていました。

もう一人は若い女の人。着ていた服の模様がそのまま、腕に火傷になって残っていました。火傷の経験はおありでしょうか？ 小さいものでも大変痛いです。あの2人の方の痛みはどんなだったのでしょうか。

家が避難してきた人たちでいっぱいになったので、私は家の下にあった畑で遊んでいました。急に一陣の風とともに雨が降ってきました。それが、後に問題になる放射能を含んだ黒い雨だったわけです。すぐに家に戻りました。

干していた洗濯物の中に、父の下着がありました。母が何度も洗いましたが、黒い汚れは取れませんでした。黒い汚れは放射能を含んだチリだったわけです。後に母に相談を受けた私は平和記念館に寄贈しました。

その父の下着は。いまでは実際に目で見ることの出来る黒い雨の貴重な資料となっています。夜が来ました。疎開先から帰ってきた下の姉と私は近所の大叔母の別荘に預けられました。夕焼けがすんでも広島市内の方向は、たくさん家が焼けていたのでしょう。真っ赤に染まっていた。

近所で死亡した人達は、のちに通学することになる己斐小学校の校庭で茶毘にふされましたと

いっても、当時の私には、朝から晩まで強烈なひどい匂いに悩まされた記憶しかありません。今もその校庭で毎年8月6日の夕方、荼毘にふされた人たちを慰霊する行事が行われ毎年参加しています。

真夏の暑い日腐りかけた多くの死体を十分な燃料なしで、校庭で焼いたらどんな匂いがするか想像してください、校庭と我が家は100Mくらいしか、離れていませんでした。

海軍の将校だった父は、爆心地近くの事務所で被曝し、6日後に死亡し、何日か後、白い箱を胸に抱いたふたりの兵隊さんがやってきました。それが変わり果てた父の姿であったことは当時の私には理解できませんでした。2人の兵隊さんが敬礼して、家を出て行ったのち、母が泣き崩れたのを覚えています。

その当時日本中が貧しかったわけですが、我が家は格別、父が戦死して収入が全然なくなり売れるものはドンドン売り払い、日々の生活の糧になりました。筍生活とってました。食べれるものは何でも食べました。鉄道草の団子も、サツマイモのつるも、カボチャは大変貴重な食料でした。

給食は子供達に取って大変うれしい時間でした。ある時カレーライスの中に入っている肉片の数が原因で級友2人が大喧嘩をしたこともありました。脱脂粉乳、トマトジュース、飼料用の大きなトウモロコシ決しておいしくはありませんでしたが食べました。確か3年生の春休み校庭は立ち入り禁止になり校庭の土はすべて入れ替えられました。

埋まっていた遺骨は今平和公園に収められています。爆心地から一番近くで被爆した級友男女各一人が ジープでやってきた米軍兵士によって A B C Cに何度か連行されました。A B C Cは日本人をモルモットあつかいし検査はしても、治療はしませんでした。原爆は世界最大の人体実験といわれています。

直接の原爆の思いではこれとぎれますが、しかし原爆は私達家族をその後も苦しめました。母は60才になった時、乳がんになりました。発見が早かったので右乳房を失うだけで済みましたが、右脇下のリンパ腺も除去したので一生右手は不自由でした。

被爆当日自分の病気(かっけ)で学徒動員を休んだ為生き延びた上の姉ケイコは、自分が生きることへの自責の念から米国に残っていた広島記録映画を買い戻す運動、テンフィート運動(米国が被爆地ヒロシマをイーストマンカラーで撮影した映画を一人10フィート買い戻すための寄付をおおぐ運動)に参加してました。

50歳を超えてから大腸に異常をきたし、壮絶な闘病生活の後55歳のとき大腸がんの全身転移で悶え死にました。あの当時はがん患者の痛みは今みたいに麻薬は使用されませんでした。娘に先立たれた母は、ケイコは世のために尽くしていたのにと大層嘆きました。母は父を原爆で失い、大変な苦勞をしたわけですが晩年は9人の孫の恵まれ幸せでした。

四国お遍路さん旅の途中クモ膜下出血で倒れ、実の娘1人と嫁2人が交代で看護に努めました。9ヶ月後、83歳でなくなりました。

あくる年、兄は定年退職後第2の職場で 食品会社で社長として活躍中でしたが、1月に1泊2日の人間ドックに入って検査していたのに、9月に肝臓ガンが見つかり、12月63歳でなく

なりました。彼は被爆当日父を探しに爆心地を歩き回っていましたから家族の中では一番放射能の影響を受けていたと思われます。まだまだやりたいことが沢山あったのに残念だったと思います。

私はといいますと、55歳のとき会社で受けた健康診断で甲状腺の腫れがみつき、甲状腺腫の治療を受け、以来甲状腺ホルモンの服薬をしています。甲状腺機能低下症です。これから福島の子供達が心配です。50年してから発病することもあるんですから・・・

2011年末、ひどい腹痛に襲われ、日赤に入院。悪性リンパ腫と診断されました。数年後妻はその時担当医から、あなたのご主人はもう2週間でしょう。と言われたことを話してくれました。それで私はなぜあの時みんなが非常に親切だったか理解できました。

痛みはモルヒネを含んだハリ薬でウソのようにはなくなりましたが、半年間入退院を繰り返しやっと翌年7月から少しずつもとの生活に戻りました。5年経過した時、胃と腸の内視鏡、PET、CTのフルコースの検査を受け異常ありませんでしたが、悪性リンパ腫には完治はないそうで、一生病院通いは続きそうです。

被爆しなくてもガンにかかる人はいるわけですが、被爆者が普通の人よりガンの発病率が10倍高いことがわかったのは1988年ABC Cの後継施設放射線研のデータからでした(内部被曝の脅威 肥田舜太郎 ちくま新書 147p)。

それに私にはかわいい孫が2人います。彼らと彼らの子孫に異常がおきないか私は大変心配です。チェルノブイリの事故以来 放射線障害による子孫への影響が問題になっています。チェルノブイリでは先天性疾患の発生頻度が2.3倍になっています。

原爆の悲惨さ、悲しい歴史を後世に伝えることは大切な事と思います。しかし広島市の平和資料館には1955年開設以来、海外から色々な国の政府の要人も含めて、累計で7000万人もの人が訪れています。

それだけの人達が原爆(戦争)の悲惨さを、あの資料館を見て理解しているはずなのに、世界中でいまでも紛争はなくなりません、戦争が続いています。

だから私は世界の経済産業構造を変えないと、戦争はなくならないと訴えています。人を殺す兵器を作る軍需産業が大きな産業になり雇用を生み出しています。軍需産業の代わりに日本ではどんなものが作られているか話しています。

北朝鮮をめぐる情勢は大変不安定になってはいますが、原爆が使われる可能性は大変低いと思います。原爆の使用は敵のみならず味方にも大きな被害を及ぼすことは、何処の国の指導者も十分理解しています。しかし原子力発電所の存在はこれからも世界中の人々を苦しめることになるでしょう。原爆と原子力発電所はコインの裏表です。

現在私は四国の愛媛県にある、伊方原発運転差し止め広島裁判の原告団長をしており、関連情報を収集しその思いを強くしています。

今後も体が動く限り、好きな桜の手入れと 子供達が夢を持つようなボランティア活動に励みたいと思っています。